

## トルコ絨毯の変遷と、「テュルク系遊牧民」との 連続性意識の「思い出され」かた

田村 うらら

本報告は、トルコ絨毯の生産・流通・消費の歴史および研究史を概観したうえで、現代トルコにおける絨毯をめぐる実践と言説を人類学的に検討することを通して、トルコ絨毯という「民族工芸品」の外部世界との交渉による変遷と、現在のトルコの人びとの「中央アジア起源の遊牧民」との連続性意識の様相を提示することを目的とした。

トルコ絨毯は、遅くとも 15 世紀には、東地中海交易を通じて西欧世界に輸出されていた。近代まで、オリエント世界の絨毯は、ごく限られた特権階級にのみ所有することが許された稀少品であった。それらが社会的・経済的威信や、神聖さと結びつけられていたことは、イタリアルネサンス・ネーデルランド派の絵画などから窺える。またオスマン帝国において、トルコ絨毯は遊牧民とその定住村落民によってのみ織られていたわけではない。歴代皇帝の建てたモスクや宮殿の内装として、あるいは諸国元首への贈答品として特注されるなど、宮廷からの直接・間接の庇護を受けつつ都市絨毯工房の絨毯も固有の発達を遂げた。しかしヨーロッパが産業革命を経て、大量消費社会に突入するとともにトルコ絨毯の生産状況は一変する。肥大化したヨーロッパの中産階級層にとって、長らく特権階級のステイタス・シンボルであった異世界の絨毯は、格好の欲望の対象となった。膨張する需要に合わせ、欧州資本が瞬く間にオスマン帝国内に流入して各地に工場 / 工房を建て、合理的経営のもと絨毯が大量生産されるに至った。絨毯産業への欧州資本の流入は、原材料、意匠、生産体制・規模などあらゆる面で変化を生み、安価な市場向け絨毯が氾濫した。共和国建国後、かつて専ら異教徒の手中にあった絨毯の工業的生産および流通分野に、国営企業が進出した。1933 年設立の国営スュメル銀行は、第一次世界大戦期の空白を埋めるべく絨毯産業の復興に着手した。そこで取られた戦略は、機械化・分業化・規格化を促進するもので、ほぼ欧米資本の方針を踏襲していた。

以上のようにトルコ絨毯は、その長い歴史のなかで幾度も変化を経験したにも関わらず、近年までそれをほとんど無視した本質主義的研究がなされてきた。いわば、大量生産品の洪水から逃げるように他者の手織り絨毯に熱狂した当時の欧米の消費者のまなざしを、研究者

たちも引き継いでいたのである。ところが、1990年前後から突如として、トルコ絨毯の「近代化」が注目され、資本主義経済や観光を原因とするトルコ絨毯の特質の瓦解が問題視されるに至った。さらに2000年前後には、変化を前提とした上で、13-17世紀の過去のトルコ絨毯と中央アジアのテュルク系民族の絨毯との共通性・連続性に注目する研究も相次いで発表された [Bekir 2001; Türkmen 2000 など]。「他者」による攪乱により見えにくくなってしまった自己を取り戻すための、別の他者への自己の拡張とも取れるこの傾向はまた、トルコ政府の欧州一辺倒路線から、中央アジアテュルク系諸国家との連携を視野に入れはじめた時期ともほぼ同期する。

報告の後半では、報告者が2005-2006年を中心に現地調査を行なった、トルコ共和国南西部ミラス地方の事例を中心に、市場経済の浸透以降の村落部における絨毯生産と消費をめぐる状況について分析した。なかでも第一次世界大戦前にミラス地方の僻村に建てられた外国資本の絨毯工房と、そこで働きのちに地元女性と結婚し子孫を残したギリシャ人デザイナーと村との「遭遇」とその後の展開に焦点を当てた。大戦後、ナショナリズムの煽りを受けて同工房は撤退した。工房で用いられた柄見本は各戸に散逸したものの、各世帯固有のデザインとして重用され続け、現在も持参財や寄進財といった威信に関わる「見せるための」絨毯に特に好んで用いられている。報告では、それらの商品価値や経費、生産者たちの語りなどから在来の絨毯との比較を行ない、彼らが外来の要素を自らの伝統の中に定位するしかた<sup>(1)</sup>について分析した。また、完全に定住して数世紀を経た村落部の日常生活において、時折出現する「我々は遠く中央アジアから来た遊牧民である」という語りが、絨毯や絨毯をとりまく習慣や生活スタイルと必ず関連づけられることを指摘した。

トルコ絨毯は、社会経済条件の変化、政治的意図など、さまざまな要因を受けて変化を遂げつつもなお、村落共同体におけるローカルな価値を維持している。遺物でも古文書でもなく、現に再生産され続ける具体的なモノとしては、それは、彼らに中央アジアとの、遊牧生活とのつながりを意識させ続ける「最後の砦」ともいえよう。なお、特に現エルドアン政権発足後、トルコはテュルク系諸国と親密化を図っており、絨毯は今後なお一層テュルク系民族の一体性の象徴としての役割を強めることも予想される。今後の展開にマイクロ・マクロ両面から注視したい。

<sup>(1)</sup> このグローバル世界の要素をローカル世界に組み入れる現象およびトルコ絨毯の歴史的経緯の詳細については、以下を参照。田村うらら（印刷中）「接触領域を誘発し演出するトルコ絨毯」『Contact Zone』第4号、京都大学人文科学研究所、頁未定。

参考文献

Bekir, Deniz. 2000. *Türk Dünyasında Halı ve Düz Dokuma Yaygıları*, Ankara: Atatürk Yüksek Kurumu Atatürk Kültür Merkezi Başkanlığı.

Türkmen, Nalan. 2001. *Orta Asya Türkmen halıları ile tarihi Anadolu-Türk halılarının ortak özellikleri*, Ankara: Atatürk Yüksek Kurumu Atatürk Kültür Merkezi Başkanlığı.

(京都大学大学院人間・環境学研究科研究員)